

コ、エルパソ等を回り、アメリカに再入国し南部のテキサス、フロリダを回ってニューヨークへ行った。ニューヨークで一月過ごして四月十一日、行きと同じ竜田丸にて帰国した。帰国後、「工芸の輸出——その根底の大きな問題——」（『報知新聞』）、「メキシコに於ける工芸事情」（『東京工芸』）、「メキシコの工芸に就て」（『輸出工芸』）、「汎工芸」に昭和十六年九月から「外游雜稿」を六篇連載（いずれも『高村豊周文集』Ⅲに収録）等、講演録や隨筆を發表、『自画像』にも詳しい。

なお、商工省より支給された旅費を儉約してメキシコの物品を蒐集し、メキシコのモデルルームを工芸指導所の中に作った。しかし、それらは戦災で灰燼に帰した。帰国後、高島屋でメキシコの工芸品を陳列したこともあった。アメリカでは喫煙具を集め、商工省に皆納めた。商工省に報告書を書いたという記述もあるが、報告書は現在、所在が不明である。なお、昭和十一年から毎年、同十七年まで商工省主催の工芸展が輸出工芸展覧会、輸出工芸図案展覧会、工芸品輸出展覧会と名称を変えながら開催され、豊周はその審査員を務めていたが、戦争が激しくなり中止され、メキシコの日本工芸展覧会も実現しなかった。

⑬ 紀元二千六百年奉祝美術展覧会

昭和十五年、文部省は挙国一致の国策を推進する一助として文展の代わりに紀元二千六百年奉祝美術展覧会を開催することとした。期間は前期が十月一日から同二十二日まで、後期が十一月三日から同二十四日までとし、会場は東京府美術館が充てられた。文部省と

紀元二千六百年奉祝会の共同主催、内閣紀元二千六百年祝典事務局および東京府協賛というかたちにとられ、作品については文展と同様に第一部・絵画（日本画）、第二部・絵画（油絵、水彩画）、パステル画、素描、創作版画等）、第三部・彫塑、第四部・美術工芸という区分に従って公募することとなり、委員長に細川護立、総務委員に菊池文部次官、歌田祝典事務局長、永井（浩）専門学務局長、岡田東京府知事らが任命された。審査委員は帝国芸術院会員および官展、在野団体の有力作家から選ばれた。その中の本校教官は次の十二名であった。

藤島 武二	清水 亀蔵	南 薫造	結城 貞松
建島弥一郎	和田 三造	津田 信夫	朝倉 文夫
香取秀治郎	小林 万吾	北村 西望	田辺 至

⑭ 献納画の共同製作

「諸新聞切抜」（昭和十五年）を見ると、紀元二千六百年奉祝に関する記事が各紙に大きく取り上げられているなかで、三月一日の各紙に本校生による共同制作のことが報じられている。左記は『報知新聞』の記事である。

よき年の記念に

海軍省と南京總司令部へ献納

紀元二千六百年に卒業する記念として美校卒業生が油繪を共同制作し海陸軍へ献奉する、東京美術學校洋畫科卒業生卅名は二班に分れ海陸兩軍にゆかりのある繪を共同制作する計畫をたて二千六